



れい
せん
せいの
専属

司こ越し扱ごしなひいはちめとだかなひー
ブライズ

立ち読み版

小説 千夜詠
挿絵 とめきち

第一章	贈り物はロボっ子メイド	006
第二章	昼は淑女、夜はダッチワイフのように	044
第三章	人形の唇	083
第四章	ロボ子、隷属ス	118
第五章	もう戻れない	164
第六章	約束	199
終章	どこでもご主人様の想いのままに	236

登場人物紹介

Characters



くらやま なつみ 倉山奈津美

明るくて人当たりが良く男女から人気のある美少女。だが、航平に対してだけは鉄壁のツン。航平の再従姉妹で、幼い頃に何度か遊んだことがある。



TDX-001 ナツミ



航平の大叔父の会社で開発されたアンドロイド。市販タイプよりもより人間に近づけた仕様で、コミュニケーション能力が飛躍的に向上している。より人間らしくをコンセプトに作られたので、人間と同じように食事もし、内燃機関で燃焼させている。その為、体表は36度程度の熱を発する。日に何度かオイル交換をトイレで行う。夜はスリープモードに移行し、専用の装置で充電を行う。日常生活をサポートするメイドタイプで、戦闘能力は期待してはいけない。ご主人様と登録された人物のどんな命令も、ロボット三原則に違反しない限り従う。

まかわこうへい 間川航平

奈津美の言葉をそのままの意味にとってしまったりする朴念仁で、しばしば彼女から攻撃を受けることもある。奈津美のことは憎からず思っている。

寝ているだけの少女がこんなに恥部を濡らしているはずはない。そしてこれは紛れもなく男性をいきり立たせるように仕向けられた物に違いなかった。

「やっぱり、こいつ、ラブドールなんだ。ここは、オナホールで……」

触れたい。包皮からぷつくりと芽を出したクリトリスが瞳に飛び込んだ瞬間、衝動のままに手を伸ばしていた。

ピクンッ！ 指先がほんの少し触れただけで、腰が微かに跳ねたように見えた。

「は、反応した。……刺激するとローションが出るって佳織さんも言ってたし、ひよっとして……、なんて芸が細かい。流石世界の村西技研、徹底した拘りじゃないか」

感動と共に、子供のような悪戯心が湧いてくる。

ツンと更に肥大してきた肉芽を突くと、またピクッと腰が痙攣した。面白がって指先で弾いてみると、僅かに背が仰け反る。全身が震えているみたいだ。

こうなると嗜虐的な気分になって、相手が作り物だという意識もあって、鋭敏そうなそこをギョッと摘んでみた。

「う……っ、くう……」

先程よりもはつきりと肉体が震えを示す。同時に、ぬちゃぬちゃと花卉の裂け目からローションが大量に漏れていった。

「またタイミングよく声が。ま、まさか、起きてないよな……」

心配になって覆いかぶさるように顔を覗き込むと、寝息さえ聞こえそうに瞳を瞑っている。

ほっとしたが、安心すると柔らかそうな全身の肌に強烈に誘われてしまう。

「こんな、大きなオッパイ……、き、気持ちよさそう……」

逆上せたように全身が熱くなってきた。自分の肌で直接彼女を感じたくなって、パジャマの上を脱いで、完全に裸になる航平。

「ナ、ナツミ……。ああ、奈津美いっ！ お、俺……」

アンドロイドではなく、淡い想いを抱いている少女のように見えて、堪らず抱きついていた。

胸板に押しつぶす柔らかく弾力のある巨乳の感触。その中にコリコリした乳首の存在感も強く、人と同じだけの体温が伝わってきた。

（はあ、これは、本当に女の子の体なんじゃないか？ 丸みがあつて、柔らかくて、気持ちよく押し返してきて……。ほんのりと汗ばんだような甘い香りがして……。ああ、奈津美っ、これは奈津美なんだ）

今だけは彼女を自分の自由にできる。たとえ幻想であつても、学園トップ3に入る美少女の官能的な肉体を身勝手に弄ぶのだ。

首筋に顔を寄せ、唾液塗れの舌を伸ばした。「ひゃ……っ」僅かに彼女の身が強張った

ように感じる。

レロ、ペチャペチャ……。僅かにしよっぱい汗の味がして、いやらしい食欲を増進させられるみたいだ。

そこから徐々に顔をまた下へと移動させていく。

肩甲骨からミルクタンクのような巨乳の合間に顔を埋めた。すべすべした木目細かな肌が心地良く頬を圧してくる。

「うはあ、こ、こうしたかったんだ。熱くて、き、気持ちいい」

両手で張りと柔らかさの絶妙な双球を脇から触る。途端に掌に沈み込む弾力の悦が起こつて、いやらしく嬲りたくなつた。

「はあ、はあ、柔らかいのに指が全部包まれて……。このエロ乳、やべえ……」

下から持ち上げるような動作から、揉みしだく感触を堪能する。五本の指は人工肉に隠れるほどに沈み込んで、巨乳全体を波立たせるように揺らした。頬に当たる蕩けそうな触覚に夢見心地になつてしまふが、貪欲に次の刺激を求めてしまふ。

顔を上げて、見下ろした先に円錐状に突起した乳首があつた。今にも母乳を噴出しそうなそこに唇を寄せて、きつく吸い付いていく。

ピクツと下敷きにした女体が微かに跳ねる。

ちゅぷつ、ぺちよぺちよ……。発情したような膨れた乳首を唇で挟み込み、内側で舌を

絡める。唇の端から漏れた唾液が新品の白く美しいアンドロイドの乳肌を垂れていき、穢す悦びを感じてしまう。

「ん……んア……っ」

また堪えたような小さな喘ぎがナツミから漏れてきた。すると気分がよくなって、もつとこのドスケベな反応をさせたくなくなってしまった。

悪戯に僅かに歯を立て、本来なら敏感な性感帯を甘噛みした。

「ヒ……っ！」

自分の体の下で淫靡な肉体が飛び跳ねる。

「はは、こいつ、感じてるのか？ して欲しい反応が、こんなに再現されるなんて、こいつをプログラムした人は神だ」

こうなると再び秘部の状態が気になってくる。ここまで徹底的にリアルを追求しているのだ。性的な刺激を与えて、どんな風に変わったのか見たくなくなった。

体全体を彼女の下腹部まで移動させ、もう一度股間を覗き込むと、濃厚な湿度と生々しい牝そのものの匂いは更に強くなっていた。

「うほっ、下のクッションまで濡れ濡れ……。こ、この奥は……」

ペンライトを片手に、もう一方で肉厚の花弁に添えて、ぐいっと広げてみる。内に溜まり込んでいた淫蜜がだらだらと漏れてきて、そして、

「す、すげえ……」

小さな窪みがヒクヒクと蠢いている様子が瞳に飛び込んできた。痙攣しているような断続的な開閉を見せるヌメヌメした蜜壺がそこにある。

「こ、こんなに小さいんだ。こ、この中にチンポが、は、入るのか？」

処女膜に思い至らない童貞少年は、自分の膨張しきった肉棒と見比べて、改めて女の子の神秘を感じた。刹那、臆する。が、誘うようにヒクつく蜜孔に堪らなくなった。

上半身を起こすと、天井の方へと向いていた男根の角度を下ろす。指を離れた濡花弁の合わせ目に先端を添えると、ぐちゃつとした卑猥な音が闇に響き、ふるふるした生温かい感触が牡たる部分に伝わってきた。

「はあ、き、気持ちいい……」

狭い穴の位置を探るようにして、ようやく窪みの感覚に当たった。さつそく淫蜜が肉棒の幹まで垂れてきて、ぞわぞわと擦られるようで心地いい。

「このまま、押し込めば、い、いいんだよな」

これが奈津美そのものだと思うと、躊躇と相反する切望が交錯した。

「奈津美……」

想いを込めてしまった呟きの途端、堅い蕾が僅かに緩んだ気がして、導かれるままに性交の境界を越える。

「うく……っ、うう……」

ナツミから苦悶のような声が漏れた。本物の少女を犯しているようなプログラムの演出に、捻じ込みたい欲求は高められ、

ぬずっ！ ズププ……っ！ ブチッ！ きつい抵抗感にも、淫蜜を飛び散らせながら亀頭は彼女の内側に侵入を果たした。

（ああ、ぬちゃぬちゃして、温かくて、吸い付いてくるう……。これが、オ、オマ○コの感触……）

陶酔しきつていく少年からは、美少女アンドロイドの表情は見えなかった。

熱く蕩けそうな肉壺に自分の分身が溶け込んでいくような感覚。だらしなく口が開いてしまい、航平は呆けた表情を見せる。

肉ピラが幹を甘く噛み挟んでくる心地良さに酔いしれそうだが、とてつもなく原始的で本能的な衝動に突き動かされた。

ぢゅぶっ！ ぬぶっ、ズプズプッ！ 溢れてくる滑りに助けられ、腰を前へと押し込んでいく。

「くふう……、いつ……」

アンドロイド美少女の体に力が込められているようだった。それは男性を初めて受け入れた処女の反応のようで、罪悪感に似た感情を湧きあがらせる一方、自分の物にする征服

欲が満たされていく。

「うはア……、お、おお、入る……っ」

あんなに狭そうに見えたのに、確かに抵抗はきついが、内側は肌とはまた別の弾力があって、カリの張りつくした肉棒の形状のままに押し広げられていった。快感を得られる部分を増やしたくて、新品の奥の方まで強張りを捻じ込んでいく。

「はあ、き、気持ちいい……。人間の女の子と同じ感触……。なのか？ それとも、ハア、ハア、やっぱり極上のオナホールになってんのか？」

ナツミのオナホールの中は、無数の柔らかかなヒダヒダが詰まっていて、それがサワサワと男根の感じやすい部分をぬちゃぬちゃと擦ってくる。根元がぎゅつと抱きしめられたように締め付けられて、穴内の粘膜に相当するものが全体に吸い付いてきた。

リアルな少女の体なんて知らない。それでもこれが名器を再現したものに違いないと思った。

「んはあ、はあ、ど、どこまで入るんだ？ うくっ……」

直ぐにでも射精してしまいそうだった。早く出してしまっても、ラブドールが早漏と罵ることはないだろう。だが、一番興奮した状態のまままで確かめないと、事後、急速に空しさを感じてしまいそうで怖い。

肉槍の奥に力を込めるが、

「ああ、も、もう……っ！ こいつ、気持ちよすぎっ」

吸着する蜜壺内。無数のヒダがそれぞれ別の動きで舐めてきて、腰が飛び跳ねそうな苛烈な刺激を与えてきた。

鞣なめされていけない窮屈な穴奥へ、ぐりぐりと強張りを突き込むと、

「ぬぐう……う、つぶうう……」

苦悶のような喘ぎを人形は漏らし、背が仰け反って、柔らかい胸の果実がたぶたと揺らされる。

もう制御なんてできなかった。

ヌプッ！ ヌップ、ヌップ……。彼女の太股を掴んで、溢れてくるローションを掻き回すように射精口を穿り返す。

「はあ、はあ、はあ、あの奈津美を……抱いてる、こ、こんなに熱くて、あ、あ、ああ……っ、奈津美、奈津美……」

腰を艶やかなお尻に叩きつけるたびに、巨乳が猥褻に形を変えて大きく前後に揺れている。つた。

ゾクゾクと強いくすぐつたさに似た刺激の快感が局部から全身を包み、一気に終着へと向かうセックスの動きが止められなくなる。

「あ、ああっ、で、出そう……う」

刹那、少女の中に放つ躊躇を覚えたが、直ぐに遠慮のいらぬ相手と思ひ出し、抜き差しを加速させた。

ヌブブツ、ぐちゅつ、ぢゅぷぢゅぷ——ッ！ 激快楽の穴の中で、肉棒が更に大きさを増す感覚。そこから脳髓に甘い痺れが電流のように走って、その瞬間——き、気持ちいい——しか考えられなくなった。

「く……っ、ああ——ッ！」

ドブツツ！ ドビュルルルツツ！ びゆる！ どびゅ、どくどく！

自己処理では得られなかつた快感に、まるで何ヶ月も溜め込んだような大量のザーメンが噴出していく。びゅくんつ、びゅくんつ、とナツミの腹部を撥ね上げるように脈動を繰り返す肉棒。注ぎ込んだ精液がとても熱く、滑る感触も呆けてしまう悦楽に霞んだ。

「お、おお……、はあ、はあ、う……っ、まだ……」

ザーメンを飲み込んでくれる穴が気持ちよすぎて、いつまでも強張つたまま躍り狂つてしまう。

こちらの震えに呼応したように、仰向けに横たわつたラブドールも震えているように見えた。

ようやく射精が治まつても、しばらくは余韻に浸って直ぐには抜くことができない。いつものオナニーの後の空しさはなかつた。むしろこんな素晴らしいアンドロイドを得



淫靡な柔らかさと瑞々しい張りを持った重量感溢れる肉果実は、強引に位置を下げたメイド服の襟で持ち上げられ、その大きさを強調させていた。緊張とじわりと高まっていく羞恥の興奮に微かに汗ばんで、甘ったるい素肌が香る。

椅子に座った少年の前に跪いて、顔を上げると、極端に目立った股間の膨らみがあった。更に顔が熱くなってくる。昨晩だってモロに見てはいないのだ。薄目を開けたそこ、暗闇にぼうつと浮かんだ棒状だけを確認している。

「で、では、前を開きますね」

「う、うん、お願い……」

伸ばした指先は震え、とても機械的に命令を実行できそうにない。航平のズボンに触れると、微かに羞恥の本体からの圧力を感じた。

（お、落ち着きなさいよ、私……。従順なアンドロイドの振り、しなきや……）

厚いズボンの生地を剥ぐと、トランクスが飛び出すほどに膨らみを見せている。絶句した。そのまま数秒固まってしまう。

これだけで大きさの予測がついた。恐怖心が確かにあるのに、鼠蹊部の奥がやけに熱い。下着のゴムに手をかけると、ぎゅつと瞳を閉じて、下ろしていった。

重い臉も、興味という助けがあつて、開かれていく。

「ヒ……っ!」

ブルツと全身が震えた。

「こ、こんな大きなものなの？ た、確かにすごく痛かったけど……。こんな、いやらしい形で……」

汗臭く蒸れた肉の硬直棒は、血管が浮き上がって、逞しくそそり立っている。赤く腫れ上がったような先端は、鋭角に鰓を張っていて、生々しい牡の匂いが鼻腔に届いた。鈴口からねっとりした透明な液体が滲み出ている、気持ち悪い怪物のように見える。

思い起せば昨晩も、処女膜を突き破られるよりも、そこから繊細な内側を押し広げられる痛みの方が強かった。

「こ、これが、本当に私の中に入ったの？ こんな……」

卑猥で、見ているだけで恥ずかしくなる。怖気づきそうな形状と大きさにも、それゆえの雄雄しさや、果敢に自分を女にした物への愛しい感情も湧いてくるのだ。

「どうしたの、ナツミ？」

「も、申し訳ございません。私のデータベースにはない大きさとエッチな形状でしたので、記録を更新していました」

「そ、そうなんだ」

航平は少し嬉しそうだった。なるほど男の子が肉棒を褒められると喜ぶというのは、どうやら都市伝説ではないらしい。

もつとも、奈津美のデータベースに勃起した男根の大きさや形がインプットされたのはこれが初めてであった。

（こんな猥褻物を、私のオッパイで、は、挟めっていうの？ 命令されて、エッチなことをする、なんて……）

だが、期待と不安の混じったような彼の顔を見ると、母性本能のようなものが擦られてしまう。今更、できないなんて言えるはずもなかった。

「それでは、胸で、ご、ご奉仕させていただきます」

「よ、宜しく」

先程見せられたアダルトアニメのヒロインのように、自分で脇から二つの脂肪球を掴む。股を開いた少年へとにじり寄って、柔らかな乳肉の間に彼の劣情の象徴を挟み込んだ。

（熱い……、ちよつとねちゃつとして、ピクピクしてる……、やだ、乳首が……）

過敏な肉峰の先端が、いつの間にかコリコリと円錐状に発情した状態で、少年の足の付け根に当たっている。

「んっ、乳首……っ」

まるで今にも母乳を噴出しそうに膨らんでしまったそれは、恋焦がれた相手との接触到いつになく敏感だった。上半身の中で、最も感じやすい箇所からスケベな衝動が起こってしまう。彼に擦り付けて気持ちよくなりたかった。

「い、いいよ、ナツミ……。心地よくなって、温かくて、柔らかくて……」

冬場に温泉に浸かった瞬間よりも蕩けそうな表情の航平。自分の肉体が高く評価されたようで、気分は悪くない。

豊満な乳肉の、ふにゅつと包み込んだ隙間から、肉棒の先端がひよつこりと飛び出していた。少年の一番卑猥な部分、鼻先まで近づいて、甘酸っぱい粘膜の香りが放たれてくる。臭いとは思わなかった。ただいやらしく、そこから視覚や嗅覚、乳房の触覚に与えられる刺激に頭がクラクラしそうになる。

（私のオッパイ……。航平のを包んでる。こ、こんなことさせて……。でも……）

メイドに破廉恥な奉仕をさせて悦ぶ再従兄弟に呆れる気持ちもあるが、単純な彼が可愛くも見えた。惚れた弱みで、彼の好み通りになりたくもある。

ふにゅ、パフ、むにゅ、むにゅつ。ゆさゆさと巨乳を上下に揺らした。

「くうっ、ナツミの吸い付くようなオッパイの感触と、コリコリした乳首が……。っ、き、気持ちいい」

初めはゆつくりと、乳房の肉を両脇から肉棒に押し付けるようにしながら刺激する。ゴツゴツした肉幹の形状を鋭敏に柔肌が感じて、逆流する悦がじわじわと肉内に染み入ってくるようだ。

「よ、喜んでいただいて、ナツミも……。奈津美も幸せです」

木目細かな艶やかな肌で男性自身を擦り付けると、硬直しきったそれから疼きを与えられてしまう。自分で乳房を捏ねるようにしながら揉んで、彼と同時に気持ちよくなるうと
していた。

(やだ……、変な感じ……。これじゃ、なんだか……。オ、オナニーしてるみたい)

そうは思っても、少年の腰に乳首が摩擦されると、熱くて、痺れて、もっと揺さぶりた
くなってくる。

「ほあ、こ、これが夢にまでみたパイズリ……。柔らかい弾力が揺れて、やらしいのがそ
のまま俺のチ、チンポに染み込んでくる。ほんとにエッチだよ、ナツミのオッパイ」

「や、やらしい……。ですか。ご主人様に悦んでいただけるように、させていただいている
だけです」

母性の象徴と同時に大きすぎてコンプレックスもある乳房が、卑猥な道具のように言わ
れて、羞恥が高まってしまう。

(そんな目で見てたの？ ドスケベっ！ でも、航平の硬いのが、擦れて……)

もどかしく、切ない気分が湧いてくる。むしろもっと激しい刺激を果肉の芯まで与えて
欲しくなった。

(そ、そんなはず……。ないじゃない。これは、奉仕なんだから。き、気持ちよくなるのは、
こ、この変態だけでいいのにつ)

だが、腰がくねりそうになる。いつの間にか、瞳には潤みが生じて、奉仕する以上に、我が儘な自分の巨乳が快楽を求めてしまう。

ち、ちがうわよ、そんなの！

早く終わらせないと、自分がおかしくなってしまうそうに感じた。

二の腕でぎゅっと肉果実を内に寄せるようにしながら、両手を彼の睾丸に伸ばす。触れる手前で、一瞬の躊躇を経て、

(ここ、気持ちいいはずだね。ん……っ)

優しく掌に包んだ。

「うはっ……、す、凄いね、ナツミ。こ、こんなエロいことできちゃうなんて。おお、そんな、転がすようにされたら……」

(なっ！ わ、私だって、こんなことするつもりじゃなかったわよ。仕方なく、してるだけなんだからね)

どれくらい力の加減がいいのかも分からない。ただここは男性の急所であるとは知っていて、慎重になりすぎたぎこちない手の震えが、かえって彼の性感を揺さぶっている。

それでも、上目遣いで見る彼の顔は、恍惚としてはいても、射精の兆候を示さない。

「ハア、ハア、ハア……、も、もつと、強くして、い、いいですか？」

「じゃ、じゃあ……、そのまま、ち……チンポしゃぶってくれ」

早く射精させて終わらせようとして出た言葉。返ってきたのは、初心者には更にハードルの高い要求だった。

(こ、ここから、口に……、こ、これを……)

パンパンに肥大したような亀頭の先から、ぬらぬらとカウパーが滲み出て、胸の谷間を光沢させている。フェラチオという行為の知識はあつて、DVDでも見せられたが、どうしたらいいものか分からない。

それでも、切なそうな顔をした彼の欲求の膨れたそのものを見せられると、どうにかしてあげたくなってしまった。

カーと頭がまた酷く熱くなったが、

「か、畏まりました」

(も、もうっ、また無茶言つて……。私だつて、そんなに器用じゃないんだからね)

ええい、と唇を生臭い肉棒に近づけた。

ちゅ……っ、ぺちや、レロレロ……オ。口付けた瞬間、ぬちゃつとした淫水の感触に身が僅かに震えたが、好きな相手の為と思うだけで、嫌悪感はなかった。唾液に濡れた舌を伸ばし、蕩けだした乳肉の間から突き出た男根の先端をちよろちよろと舐め回していく。

「うほっ、キスと同じいやらしい動きで……。そう、いいよ、ナツミ」

ペロで突くだけで、ピクピクと肉棒が脈動してくれる。自分の奉仕で感じてくれている

のだと分かって、安堵と嬉しさが湧いた。

（ふあ、エッチなオチンチンの汁……、しよっぱくて、ぬちゃぬちゃして……）

卑猥な形状に肉果実を歪めながら、唇を沈めていく。

「はむ……んっ、ちゅう……う」

唾液を漏らしながら、窄めるように吸い付いた。彼から早く搾り取ろうと自然にしてしまったことだが、

「うわア、き、気持ちいい。カリ首だけ啞えて、そ、そんなにチューチュー熱心に吸うなんて……、ナツミ、エロ過ぎ……」

顔が燃え上がりそうだ。

（そ、そうなの!! って、私、そんなエッチな子じゃないってばア!）

ぢゅるっ、きつく吸い込んでカウパーが喉にまで届いてくる。彼の興奮が高まったのか、ピクンと肉棒が一度跳ねて、生々しい感触が舌を揺らしてきた。

「ご、ごひゅじん様の反応はら、状況を分析ひて、行ったまわれふ」

もうこれ以上、破廉恥な存在に言われるのが耐えられない。

いきり立った彼自身の全体を刺激するように、頬張っていった。

ちゅぶっ……、ずりゅっ、ずるるっ……。肉棒のゴツゴツした食感が口内を満たしている。太い血管の浮き上がりを舌が感じて、口蓋に亀頭の膨らみが当たってきた。

「んっ、オッパイも……ペチャ、ペちよるう、おくひも、あふい……」

舌ペロをカリ首の下に絡めると、牡肉の味が濃く感じられてくる。こちらが奉仕しているのに、喉の奥の方まで刺激が届いて、口内が確かな性感帯に変わってしまう。

ぬぷっ、ずにゅっ、レロおっつ。唾液がカウパーと混じって、肉棒から胸の谷間に滴っていく。また逆上させてきそうになった。

(胸を擦ってるのに、あそこも……熱い……、ひゃっ、な、なんで、クリトリスが、やだ捲れてきちゃう)

自身の肉体の反応に戸惑いながら、これは全部、彼の為に行っていること。仕方がなくしているのだと、言い聞かせる。

そんな少女の羞恥に気付きもせずに、

「ああ、き、気持ちいいよ。オッパイが柔らかくて、こんなに激しく揺さぶって……、ナツミの口も、しつこく吸着して、スケベだな、ナツミは……」

また恥ずかしいことを平気で言う少年に、少し恨みがましく上目遣いを送った。

でも、恍惚とした彼の表情を見ると、愛おしさを感じてしまう。

「れ、れは、ナツミを、んちゅっ、くちゅっ、ずりゆるっ、もつろ、堪能ひて……」

ふにゅう、ぐぢゅっ、ぬぢゅぢゅ……っ。口内でレロレロと亀頭全体を舐め回し、肉幹を胸の柔肉で捏ねていく。舌が過敏に男性を感じ、巨乳の脂を掻き回す感覚に悦楽が湧い



ヒクヒクと鯉の口のように蠢くアナル孔に鈴口が愛撫されている。

過敏に感じて震える肢体。振り返る表情が切なそうに眉根を寄せていた。

「さあ、このまま奉仕してくれ。分かるだろ、このままだ」

「あつ、あつ、そんな……、初めての場所で……こ、怖いけど……」

隷属に感じる少女は、恥ずかしい無理難題にこそ無上の悦びを覚えるのだった。

ぐっ……、ぐぷっ！ 先程ふやかせたとはいえ、開発もしていない孔器官は、メリメリと軋むような音をたてて、きつい抵抗感がある。

「う……っ、くはア……、さ、裂けるう……」

それでも奉仕癖の少女は汗の滲むお尻をこちらの腰に押しつけてくる。

アナルの皺孔が内に減り込み、湿った周囲より一層熱い腸内に肉棒の先端が捻じ込みだした。腸液の滑りの感触が、ぬちゃぬちゃと張り付いてくる。

「ほら、もう少しだ、奈津美。どんな場所でも、俺のを気持ちよくさせるオナホールでいてくれ」

彼女の顔つきは、アパートで奉仕する時のナツミそのものになっていた。新しい刺激に、メイドのスイッチが完全に入ったようだ。

「は、はい……、んんっ、奈津美は、ご、ご主人様の……、快楽穴ですうっ！」
ずぶっ、じゅぶぶっ！ カリ首が悦楽の壺に飛び込んでいった。

「おおっ、入るぞっ」

「んっ、くふ——っ！ お、お腹がつ、張って……、うぐうっ」

いきみ、力を抜き、それを繰り返しながら、肛辱に震えるお尻を押し込んでくる。健気な腰振りのたびに、感じる悦が広がって、ぬるぬるした熱い彼女の内側に包まれていった。（はあ……、凄い……、ぴっちり吸着してきて……、き、気持ちいいっ！）

エッチな漫画やDVDを見ながら、一度はお願ひしてみたかった場所だ。より深く吸い込まれるような感覚に、遅々と時間をかけながら、肉棒はアナルの奥に飲み込まれていく。

「はあ、はあ、入った……ア？ ご主人様を私のお尻が、囓んでる」

「ああ、い、いいよ、奈津美……。やっぱりこども、スケベにできてるんだな、変態ご奉仕メイドのお尻は……。肛門が、ヒクヒクとして、中は、くちやくちや舐めて……」

息苦しそうにしながら、命令を実行できた嬉しさを顔に表す奈津美。乱れた呼吸に、額から汗を滲ませ、艶やかさが増していた。

美少女のお尻の孔の中で、ググッと大きさと硬さを増して、ここから得られるであろう至高の快感への想いが募る。だが、腰を動かすのは自分の役割ではない。

「さあ、ご奉仕の本番はこれからだろ」

パンッ！ 馬を走らせるように牝尻に平手を打った。

「ひゃいんっ！ 奈津美の、お、お尻を、存分に味わってくださいませ。はあっ」

ぐぼっ、ズブズブ——っ！ ぬぶっ、ぬぶっ！ アナルの皺目が捲れ上がり、自ら腸奥を穿り返させる肛辱のメイド。

（やばいっ、この刺激っ……、チンポが全部っ、持っていかれそう）

主を満足させようと健気に臀部が波打ちだし、擦られるアナル粘膜の甘酸っぱい香りが上ってくる。

「んっ、んはっ、ハア、あっ……、きつ……いいんっ」

痛みを堪えるような呼吸と喘ぎで、柔らかな尻肉でこちらの腰を叩いてくる。続けて打ちあがる花火の音に紛れて、パンパンと衝撃が響き、眼下にスウィーツのように震える尻房が見えた。

「くっ、ふああ……、だんだん、お腹の中っ、熱くなって……じわじわくる……う」

緩やかだった少女の腰の動きが徐々に激しくなってくる。苦痛を示していた表情が逆上せたようになってきて、時折振り返って送られる視線は、甘えるそれだ。

（ほあっ、滑りがよくなってきた……、ぎっちり張り付いたのが、ぬちゃぬちゃ擦ってくる。俺のが、奈津美と一緒にになって、溶けていくみたいだ……）

背中に上半身を覆いかぶさせて、伸ばした両手で大きく前後に揺れていた肉果実を掴む。「あはっ……、オッパイっ、感じますう、嬲ってくださいっ」

汗ばんだ木目細かな乳肌の吸い付いてくるような感触を愉しみ、優しく擦りだすと、乱

れ浴衣の少女は一度瞳を閉じて、愛撫を堪能していった。もう尻孔の拡張にも慣れたのか、腰の動きもリズムカルに、今、この瞬間の淫らな接触を舐るように味わっているかのようである。

「奈津美の体……、どんだけ姦^やっても、新鮮で気持ちいいよ」

濃厚な牝の匂いを全身から放つ彼女の淫蜜が増したようで、剃りあげたままのワレメから太股へとだらだら流れていた。雪白の素肌が上気して、性の喜びを体中から表現しているかのようだ。

「う、嬉しい……、私も、はあ、航平の、ご主人様のオチンポなしでは、も、もう、生きていけないイっ！」

可愛いことを言われて、気分はいい。ただやっぱりエッチの時の自分は意地悪だった。

「なんだ、お前はチンポがあればいいのか？ 俺を一途に思いながら、実はこいつのことばかり考えていたんだろ」

ぐぶっ！ こちらから、肉棒を深く直腸の奥へと突き込んだ。

「んっ！ いやっ……ん、な、奈津美は純情な女の子です。そ、そんなこと……、あ、あんっ、あん……」

乳房への優しい愛撫もそれまでで、巨乳を根元から引き絞るように握り締める。五指が全て柔らかな乳肉の中に隠れるほどにすると、肉峰は膨れて張りを強くさせた。

「成長した俺を見て、大人のチンポを想像してたんじゃないか？　こんな風に、自分でオッパイ揉みながら」

ミルクを大量に内包したような脂肪球を捏ねくり回す。責めともいえるキツイ愛撫を受けると、狂おしく頭を振って、彼女は腰の動きを淫乱そうに激しくさせた。

ぬぷっ、ずっぷっ、ずっぷっ！　肉棒の大きさと形通りに膨らんだ腸壁が局部の全てに甘く痺れる刺激を与えてくる。挿入したての時よりも緩んでいるのに、尻孔の扱きは快感を膨らませてきた。

「ハア、ハア、ご、ご主人様のメイドになるまで、オナニーなんて、したこと……、はア——ッ、ありませんっ、あっ、あっ……」

吐息から溢れる悦が濃厚になっていく。

「じゃ、じゃあ、メイドになつてから、してたつてことだな？」

「そ、それは……ひやううっ、オッパイも、お、お尻っ……何なのっ、いいよオ」

「こらっ、質問に答えないか？　はあ、はあ……」

「ら、らつてえ……」

媚びて甘える瞳のアへ顔をこちらに振り向かせ、上り詰めるのを切望するように、我が儘にお尻を揺さぶってきた。

「俺の見てないうちに、んっ、ど、どんなオナニーしてたんだ？　正直に答えたら、壊れ

るくらいにケツ孔抉ってやる」

ブルツと汗ばんだ肢体が震える。泣き出しそうな切ない顔を見せた後、

「んアアアア——っ、ご、ご主人様の、パンツの匂いを嗅ぎながら、それをペロペロして、やってましたアっ！」

プチャッ！ 恋人のワレメは淫蜜を飛び散らせた。

「こ、このっ、ド変態め。お仕置きしてやる」

ズブズブッ！ ぬっぶ、ぬっぶ、ずぶ——ッ！ 募っていた牡の本能の欲求に任せて、苛烈に直腸の奥まで掘りぬいていく。

重い衝撃に乱れる彼女は、舌を突き出しながら唾を飛ばした。

「おほオっ！ ゴリゴリくるうっ！ お尻が無茶苦茶されへっ……、いつ、イイ——ッ！」

腰の位置を僅かに下げて、腸を捻るように小突き上げる。膨張する衝動に、尻孔への暴

姦は止められなくなった。

「うはア、メイドアナルっ、さ、さいこーっ」

羞恥も意識できなくなったか、奈津美は下品な蟹股になって、食欲にお尻を躍らせる。イキ狂いそうな上向いた瞳から涙を流し、口元は涎塗れになっていた。

「ケツ孔っ、捲れてりゆううっ……、おにゃかが、跳ねれっ、も、もっろっ、お尻に、罰しれえっ、おっ、おうううっ！」

込み上げてくる熱いものが、肉棒の深い場所を圧迫してくる。互いに理性を失って、森の中で行う獣の交尾。脳内に満ちてくる快感は、甘美なうねりを起こさせて、臨界を突破させた。

「ぐくうっ、全部、飲み込んでくれえっ！」

破裂しそうに膨れ上がる亀頭。灼液が一気に尿道を駆け抜け、

どびゅんっ、どくどくっ！ ドピュルルッ！ ぶびゅるるっ！

四尺玉が夜空に大輪の花を咲かせたその時、直腸内にぶちまけられる。

「アヒ——ッ！ ザーメンっ、染みるう……、イクっ、イク、お尻っ、焼けイク——ッ！」

プシャ——ッ！ ぐしよ濡れの肉裂から潮吹きあげながら、メイドは背を仰げ反らせた。

嬌声をあげる濡れた唇。乱れきった汗塗れた浴衣姿で、全身を戦慄かせ、締めつけてくる

牝尻が牡汗を最後の一滴まで搾り取る。

「うはア……一緒に」

「蕩けちゃううう……、はあっ！」

美少女のアナルに包まれ、脈動が止まらない肉棒。ヒクつく彼女の蜜壺からも、ピュッ、

ピュッ、とイキ潮が飛び散っていく。

花火大会のグランドフィナーレ。連発される空中の火の滝に照らされて、愛しい少女の

恍惚顔を優しく見詰める少年だった。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なり、美少女の方向性に入っていない

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!